中川久美子（元横浜市都市科学研究室）ヒアリング第二回
2023 年 6 月 23 日（金）午後 2 時から 4 時 30 分
なか区民活動支援センター研修室 1 号
NPO 田村明記念・まちづくり研究会側（田口俊夫、青木淳弘）

中川　革新自治体って、今、あるのかしら。

田口　ないですね。だから、かつての革新自治体を検証しなおそうとしています。
たくさんありましたね。

青木　従来だと、制度とか、政治とか、そういったところに、主な関心があったと思うのですが、私は、個人の関係に関心がありまして、そういうアイデアに行き着いたのは、ここ数年の間なんです。

中川　なんで、また。

青木　もともと、なんで横浜みたいな町とそれ以外の町と、どうして違った町並みができるのかという素朴な疑問から入りました。それで田村明さんのことを知りまして、その周りにいる人が何をもって革新性と言っているのかに関心を持つようになりました。

中川　それで、こういう質問になったのですね。

青木　そうですね。

中川　何を聞きたい質問なのか分からなくて。何を知りたいのかなというところが、興味がありました。

青木　なんでその職場だったのかとか、どういうモチベーションで仕事をされていたのかというのが、私個人としては、一番関心があるところです。

中川　そういう意味だったら分かります。

田口　青木さんが提案した分析論の前に思っていたのは、組織論で分析できんじゃないのかと思っていた。それから、あらかたやってはみたけれども、それだけではちょっと捉えきれないと感じ始めた。というのは、田村さんはじめとして、松本さんも、みんな非常に特殊

な人材が集まり、飛鳥田一雄さんも、そうですよね。だから、いろんな人が集まって、そこから生まれたものでないのか、と考えるようになった。

中川　化学反応を起こしたのよね。

田口　鳴海正泰（飛鳥田市長の政治参謀）さんは組織論で整理したかったかもしれないけど、革新自治体という決められた方程式があって、それでやっていたという風にはとても見えない。他の革新自治体もみんなそうで、革新といっているけど、そんな風にはくくれないじゃないか。だから、それは何なんだろうという話をだんだんすると、こういう方向に来たわけです。

中川　そういうことになってきた。

青木　そうですね。

中川　新しい目のつけどころではありますよね。

青木　そうだといいなと思います。従来の研究でも田村明さんといえば、例えば、都市デザイン行政に注目いってしまう傾向にあったと思うのですが、やっぱり、一緒に働いた人たちがどんなことを考えていて、アイデアはどこから出てきたりとか、もっというと、企画調整という枠組みの中で、いろんなことをされたことが、そこで完結したのではなくて、市長が代わっても、そういうものって引き継がれていきますよね。

中川　そうですね。

青木　だから何が残ったのかということまで考えないと、本当の意味で革新性というものを捉えきれないのではないかというふうに思ったということですね。

田口　そうですね。

中川　私も今、思い起こしてみれば、極めて特殊な時代だったと思いますね。当時の飛鳥田市政が始まったときっていいますか、時代状況が、全然、今とは違うし、多分、他都市とも違うし、諸外国とも、全然、違うだろうなって感じは、すごくしてますね。

青木　最初に、前回オンラインで話を伺ったときに、「学生運動から連続した場所だった」というふうに横浜市を捉えていらっしゃったのが、印象に残っています。

中川　そうですね。

青木　特に、どんなところに、それを感じたのかについて伺いたいと思います。

中川　大学を卒業した後、学習塾のアルバイトをしてたんですよね。たまたま、実家の近くの市民が川崎市長に立候補したんです。選挙運動を手伝ったり、ウグイス嬢みたいなアルバイトしたりしてました。

田口　そうですか。

中川　義理の兄がその選挙運動に関わっていて紹介してくれたんです。当時応援した川崎市の市長も革新市長でしたね。その後,横浜の都市科学研究室のアルバイトがあるということでそこの仕事を手伝った。という流れですね。そのときは、そこに就職するっていうことではなかった。外事課で翻訳職を求めていて、ドイツ語の勉強してたんです。私は、翻訳職として都市科学研究室に入庁しました。当時は、松本得三さんが室長で、職員の岡村さん、もう一人、春田さんという係長の 3 人でした。

田口　そうですね。

中川　室長の松本さんに都市科学研究室で仕事をしないか、と正式に誘われたのです。当時の都市科学研究室では、「横浜と私」という市民生活白書を出版し、ベストセラーになって評判になっていましたが、私はその新聞記事を読んで横浜市も面白い仕事をしているのだなあ、と感じていた。その時には都市研というところがそのような仕事をしていたところとは知りませんでした。

就職した年のことだと思うんですけれど、米軍の戦車を横浜の村雨橋の手前でベトナム反戦のデモ隊が止めた、ということが起こりました。ベトナム戦争で故障した戦車を相模原補給廠で直して、再び横浜からベトナムに送るという時に、反戦のデモ隊が止めて、結局戦車は相模原補給廠に戻っていったという事態のあった時です。戦車を戻した根拠は、戦車が橋の重量制限をオーバーしていた、ということです。都市科学研究で渉外部の部長を松本さんがヒアリングしていた情景を鮮明に覚えています。飛鳥田市長はデモ隊を先導していました。私は、その時のデモに行ってたわけではないですが、学生時代にベトナム反戦のデモに行っていたので、仕事に対して何の違和感もなく、価値観を共有できる場だったというのは、本当にラッキーでした。そうゆう流れの中で、仕事が始まったっていう感じですね。

学生運動をしていた人たちは、卒業後の進路をどうするか、いろいろでした。港湾労働者として働いていた人もいるし、私の夫は、慶応の経済学部の大学院を受験してました。経済

は荒野だからゼロから組み立てる、というような考えをもっていました。院の入試を受けたら、教授会にかけられてとらないと言われた、と聞いています。マル経の先生ですが、集会の時にマイクの取り合いで小競り合いをしたとかで悪い印象をもっていたようです。が、共産党の先生が自分が受け入れると言ってくださった。その方は特攻隊の生き残りと聞いてます。その後、生活構造論の先生のところで学んだ、という経緯があります。

　青木　ちょっと生活構造論が出てきて、中鉢正美さん。

中川　中鉢先生。思い出した。ご存じ？

青木　はい、存じております。『日本の都市下層』は中川清さんですか？

中川　そう。それ、夫なの。ご存じ？

青木　はい、もちろん。そうでしたか。

田口　同じ慶応大学ですか？

中川　慶応の経済ですね。

青木　そうですよね。

中川　夫は、経済のドクターを終えて、30 歳でやっと、新潟大学短期?に就職、そして「日本の都市下層」を執筆していた。その後、日本女子大を退官した篭山先生の後任として東京に呼ばれてもどってきた。篭山先生ご存知?。

青木　はい、分かります。

中川　あの先生が退職された後のポストで呼んでくれた。

青木　そうだったんですか。生活をベースに日雇い労働だとか、そういった人たちの。

中川　そうです、そういう感じの先生でしたよね。国勢調査に載らないような人とか、そういう人たちも全部ヒアリングしていた。すごい先生です。

青木　その関心は都市科学研究室でされていたことにも何となく重なってますか。

中川　重なってますね。偶然ですけど。

田口　そうですか。

中川　それこそ、市民意識調査で階層分析するときに、住居形態がものすごく、はっきりと格差を表してる。「一番しんどい人たちが民間アパート層ということがわかり、その民間アパート層の居住者の調査をしなさい」と松本さんに言われて、神奈川区の神之木台周辺の民間アパート群の 104 世帯の市民に生活実態の調査をしました。

自分で調査票を作って一軒一軒、歩いてまわりました。「おまえ、何しに来たんだ」「二度と、こんな所、来んな」と怒鳴られながらも協力してくれた。醤油のシミのついた調査票の重みは忘れられません。一軒一軒、歩いて回って。それ集めて、調査表を回収して分析した。その経験は、私の調査というものの原点です。

原稿は、松本さんにたくさん直されるわけです、原稿用紙一枚に付箋が 10 枚ぐらい付いてくる。それを、もう一回、書き直して、そうすると、また、たくさん付いてくるっていうのを何度もやり直してました。私の作業を見てると、夫が「こんなに細かく大学院生でも見てくれないよ」とか言ってました。「すごいな」って言ってました。すごい貴重な体験をさしてもらったんですよね。

原稿を見てもらっている時は心折れそうでした。ごはん食べられない。1 回で終わらないんですよ、しかも、今では考えられないですけど、「出勤しなくていい」って言われるわけですよ。「家で 10 日間なら、10 日間の間に書き上げてこい」って言われるわけですよね。最初、余裕があってほんわかしてるじゃないですか。間近になったら、もう眠れないわ、ご飯、食べられなくなるぐらい、怖くて。何度も繰り返して、OK サインが出るっていうか、OK ってわけでもないんですよ、もう印刷屋にまわしてしまう、当時は活版印刷ですが、最終校で直すのは大変なのですが、一字一句粘って校正するのが、松本さんでした。そういう体験をさせてもらいました。最初は、研究室は何だか暇そうな所だなと思ってましたが、とんでもないところでしたね。

同期の女性職員で大学時代学生運動やっていた職員と仲良くなり、彼女が「アルバイトをさがしているというので、この部屋暇だから」とか言いながら電話してたら、松本さんが横の机で聞いてて、「ばか野郎」って怒られて、「暇なもんか」とか叱られて、そのまま「民間アパートの調査、行ってこい」とか言われたのが始まりでした。

青木　民間アパートに調査に行く最初のきっかけって、それだったのですか。

中川　きっかけですね。松本室長に叱られて。

田口　あの調査（注：田口の勘違い）はいろんな人が関わってやっていましたよね。そうでもないですか？

中川　あの調査自体は 1 人です。

田口　分析したときですか。そうでもない？　『調査季報』に載っているとき、結構、いろんな人の名前が載ってるなと思ったんですけど（注：田口の勘違い）。

中川　居住者の生活歴の調査。神之木台周辺の調査は、私と、もう一人、斎藤さんという建築職の男性職員が民間アパートの分析を書いてましたけど、実質、調査したのは、私一人ですけど。全体の枠組みをよく覚えてないけど、住工混在地区の調査でした。例の神之木台辺りも含めた地域と、南区の井土ヶ谷辺り、に調査をかけてたんですよ。井土ヶ谷の調査は岡村さんがやったのか、あまり記憶ないですけど、神之木台周辺の民間アパート層の居住歴の調査は、ほとんど私一人でやりました。

田口　岩崎駿介（都市デザイン担当）さんなんか全然関係ないですか。

中川　全然、関係ない。

青木　その調査に携わって、いろいろやり直しって言われる中で、だんだん仕事に対する目覚めというか。

中川　そうですね。まだ、ものの見方とかなかった。調査というものの原点、意識調査に回答する市民の生の生活に接してるっていいますか、その調査を通して。これだけの重みのあるものだっていうのは、もう身に染みて感じたわけですよね。だから、安易に質問して、安易に回答もらうっていうよりは、調査っていうものの原点というのは、そういうものだし、相手が言いたいことをちゃんと聞かなきゃいけない。自分が知りたいことっていう以前に、相手が持ってる気持ちとか問題ってものが、何なのかっていうのを引き出すのが調査ではあって。こっちが勝手に仮説を立てて、こうだろうから、これを実証する、実証しないってもんじゃないというふうなことを教えられたっていうか、そういう体験でしたよね。

青木　よく松本得三さんが「現場主義」って言っていましたが、その辺が重要なんですか。

中川　そうですね。松本さんの現場主義っていうのは徹底していました。朝日新聞の盛岡支局長なさってたときの当時の新入社員の方たちと、横浜時代の職員とで松本得三さんの「しのぶ会」というのを 40 年近くやっているのです。木原啓吉さん、岩垂さん、轡田さんとか

有名な方たちなで、すでに亡くなられている方もいますが、小さな間違いなどOK出るまで大変だったっていう話で盛り上がります

私は行政職員でジャーナリストではありませんが、足洗川という都市の小河川の浸水の調査の時にも、「こんなもの、あるわけないだろ」とか怒られて、どこまで浸水してるかということを聞き直しに行ったとか、そういうことが何度もありました。松本さんの現場主義とは、市民の生活現場の実態と行政現場の実態を正確に予断なく把握することだったと思います。

田口　被害の実情が伝わらないということですか。

中川　ちゃんと正確に伝える。そういうすごい厳密さと誠実さでは厳しい人だったけど、優しいんですよね。

青木　不思議な魅力を。

中川　優しい感じの人。会ったことあります？

田口　松本さんにお会いしたことがありません。

中川　ないの？

田口　全くないです。だって、私が市役所に入ったのは、1978年ですから。

中川　78年っていうと。

田口　もう松本さんは相模原市長選に出て市役所はお辞めになっています。

中川　都市科学研究室あったでしょ。

田口　それはありました。

中川　そういうタイプの方でした。

田口　それって、春田さんとか岡村さんは、全然関与してないのですか？

中川　春田さんは庶務をやってました。

田口　春田さんは京大出の方ですよね。

中川　京大の法学部出身。一番最初の出勤した日に教えてくれたのは、半日かけて、小包を、どうやって、きちんと包むかっていうこと。それは鮮明に覚えています。

田口　デパートみたいに。

中川　クリエーティブな仕事する方ではなかったです。

田口　どうして、都市研にいたのですか。

中川　そういう人事なんです。

田口　岡村駿さんは、選挙の票読み屋さんみたいな仕事をしていたようですね。

中川　票読み屋さんだし、意識調査も経験豊富でしたがそんなに厳密な人じゃない。

田口　そのようですね。

中川　松本さんがいたから持ってたようなもんですよね。最初の頃から。すごく楽しかったですよ。

青木　楽しかったですか。

中川　職場に行くのが楽しい、自分がいろんなことが分かってくる、いろんな力がついていくとか。しかも、話ができる、議論ができる。

田口　誰と？

中川　松本さんと。

田口　松本得三さんとね。

中川　お昼も、ずっと一緒だったし。ちょうど私と同じ世代で入ってきてる人たちが、ほとんど都市計画屋さんも、プランナーも、普通の会社は学生運動やっていた人は採用してくれ

ないですから、革新自治体である横浜市役所に就職した人が多かったんです。何となく同じような世代で、同じような経験した人たちが、市役所に居て、都市研に集まっていた。いくつも研究会を立ち上げて議論をしていました。当時の課長さんというと、日曜日に釣りに行った話とかしか話題にならない。

田口　そうでしょうね。

中川　そういう感じの。

田口　そうですよね。よく分かります。

中川　知的な議論や雑談ができるような職場は少なかったです。例えば『調査季報』の編集にしても青天井なんですよ。自由にやってました。

田口　そうですね。僕らが入った 1978 年ですら、企画調整局の中の課長クラスですら。全く、そういう感じですよね。

中川　松本さんの周りに集まってる人たち、若い人たちは、そこで刺激を受けていたのでは、と思います。ヨコヤマさん、ササキさん、イシザカさん、エンドウさんとか。

田口　横山悠さんですね。

中川　あとミヤナガさん。

田口　ミヤナガさん。

中川　ホリコミさんが結婚してミヤナガさんに。

田口　ホリコミさんがミヤナガさん？

中川　ミヤナガさん。そういう仲間もいて、一緒に遊びに行ったりしましたから、夏休みとかね。そういう中で恵まれた環境だったと思いますね。

青木　議論できる。

中川　議論もするし、いろんなことを話せるって。

田口　そうですね。

青木　そういう意味では、学生運動の「延長戦」というか、つながりというか。

中川　それ、大きいですよ、だから。周りのそういう人たちがいたってことはね。

青木　多かったですか、やはり。

中川　ええ。それなかったら大変でしたよ、多分ね。ぽつんと、どこかの職場に入って、いたら、話もできない、意欲なくして、何していいか分からなかった、と思います。

田口　そうですよね。

中川　ただ、都市研では、革命とか、革新とか、そういう言葉じゃなくて、きちんと生活に根差しながら、何を、どういうふうに変えていったらいいか、仕事の中でね。道筋をつけてくれた人ですよね。

青木　松本さんですね。

中川　松本さんは、革新自治体の大きなスローガンじゃなくて、ここにいて、次はどういう仕事をすべきかと、その仕事の質をきちんと評価してくれて、次のステップを自分なりに見いだしていけるという、そういう道筋をつけれる人だったの。本当、ラッキーだったなと思います。一緒に仕事できのは3年ぐらい。朝日の人たちはみんな1年半ぐらいですから。それでも強烈に体験が残ってるんですから。そういうラッキーさのつながりを、『調査季報』や様々な研究会をつくって広めていったみたいな気はします。つながりを。若い人たちにもね。

青木　基本は、最初の松本さんとの出会いがあったわけですね。

中川　ありましたね。仕事の仕方っていうものですよね。ものの見方。自分で自分の言葉を見つけていく、自分の言葉を持つっていうことですよね。

田口　そうですよね。

中川　役人が自分の言葉を持って、借りものじゃなくて、自分の言葉を持って仕事をしてい

くと。それを書いて発表する場として『調査季報』があった。すごく、大きいですね。

田口　大きいですね。

田口　そうですね。

中川　職員にとっては、仕事の次のステップになってるし、そういう場があるってこと、ものすごく大きかったと思いますね。

青木　本当に大きかったのですね。

中川　松本さんが退職された後の都市研での仕事ですが、家族問題研究会とか地域社会研究会をやったことは、テーマとしても職員とのネットワークとしても大きかったと思います。研究会は2、3年かけて、現場の人たちと一緒に動いて、材料集めて調査をして報告書にまとめました。私が担当したのは、家族問題研究会ですが、高齢者の介護と子どもの養育機能の問題を取り上げ、福祉事務所のケースワーカーや保健所や学校の養護教諭などに参加してもらい、ケアの現場の実態を教えてもらったりしてました。個々の生活の最も困難な人々と対面している彼女たちとの関係は今でも続いています。そして、後のコミュニティにおける調査などの布石になっていますし、調査季報などの課題認識の下地になっています。

中川　編集者として気にしていたのは、各局の課題みたいなのが、何となく見えてるときに、今度、これを特集したら、この人だったら書けそうだなっていうようなことを、ネタとして結構たくさん持ってて「じゃあ、書いてみない？」って声かけると、結構、喜んで、「うん、やってみる」みたいな。そういう感じのネットワークは結構つくってましたけどね。

田口　それって、相手となるのは係員であったり、せいぜい係長ぐらいでしょう？

中川　そうですね。

田口　それ以上の役職者に書かしても。

中川　いや、そういう感じでもなかったですね。局によりますね。でも、鈴木隆さんは、保育の係長の時に横浜市の保育行政のあり方を批判的に書いて、こうすべきという提案をして、確実に仕事の中で実現した人です。すごい人です。

田口　だけど、『調査季報』をずっと見ていても、最近の号まで基本的には係員か係長に書

かせるスタイルが継続していますよね。

中川　もちろん、そうです。

田口　発行の号数は少なくなってきたけど、そのスタイルは生きていますよね。

中川　そうですね。係長クラスがほとんど多い。そのときに書いたものってというのは、その人のその後の役所人生にすごく残るんですよ。

企画調整室の中に入ってしまって、都市研の廃止っていうよりも、都市研をそのまんま企画調整室の隣に持ってきたっていう話。予算も人も職制も変わってない。ただスペースが極めて狭くなり、静かな環境から四六時中大きな騒音を立てるゼロックスの隣に座ることになった。実は、コミュニティの調査のプレッシャーもあり、私は体調を崩してかなりの休暇を取ることになったのはとてもつらい経験として覚えています。しかし、その代償としては、接触する相手が、つまり調査をやった後に報告する相手が、例えば理事だったり、市長まで一対一ではないけれど、話せるようになったのはすごく大きいですね。

田口　逆にね。

中川　そうすると、基礎調査の結果を『調査季報』や報告書の刊行だけではなくて直接企画調整室長に話せる。コミュニティ行政基礎調査もそうですけど、市民活動は町内会などの地縁コミュニティと子育てや介護のテーマコミュニティとがどの地域にも併存していて、という分析を話せる。それが市長にあがり調査季報の市長鼎談となり、パートナーシップ行政を進めることになる。

当時の市民参加とか非常に形骸化してましたからね。行政の設えた参加の場、例えば地区センターの建設委員会や公園の委員会などの参加の場には町内会の役員しか出てこないみたいな。テーマ型のコミュニティ活動がものすごく活発になってて。そういう人たちは地域の女性が多かったのですが、参加の場に出られないのは、おかしいのではないか、みたいな話をきちんとできる。当時の市長は、もともと市民参加に関心の高い方でした。

田口　高秀市長は、そうみたいですね。

中川　そうです。

田口　割と、市民参加に関心が高い

中川　そうですよ。興味あった人です。そういう人だったんですよ。建設省の事務次官やっ

てながら。

田口　官僚のトップをやっていながらね。面白いですよね。

中川　面白い人だったですよね。だから、そういう対面的に、直接、市長に話すっていうことができるようなっていて。結構、尊重してくれました。中田市長もそうでしたよ。

青木　中田市長ですか。

中川　横浜会議というのは、市民提案の政策提案ができる仕組みで、採択されたテーマは、相手の事業局と一緒に調査をして、実際の事業につなげるという仕組みです。中田市長の時に横浜会議をつくったのです。中田市長に直接報告したときに、市民の提案は幅が広すぎることが多く各課との調整が難しいのです、というようなことを言ったら、女の人は率直でいいなあ、と言われました。一体市長にはどのような情報が上がっているのか、とびっくりしたのを覚えています。

田口　そういうのがあったんですか。

中川　調査季報の 120 号で高秀市長にコミュニティ行政基礎調査の報告をしてからの高秀さんが、「これからは、『「市民と行政のパートナーシップ』」の時代だ」と明言された。そして、市長プロジェクトとして「市民参加推進プロジェクト」というのが始まったわけです。私たちが提案したのは、「新しい市民参加の仕組み」として、参加の場に公募制を取り入れ、町内会の役職者のみでなく地域で関心ある人も参加できるようにした。また、合意形成のプロセスを丁寧に行い、結論ありきの参加ではない徹底した議論を行う。たとえば、南区の蒔田公園は野球場でしたが、近所の子育て中の母親たちも利用したい、というニーズがあった。結局徹底したワークショップや母親たちの調査などから総合公園としてみんなが利用できる公園になった、というようなケースがあります。18 区でそのようなパートナーシップモデル事業を展開したわけです。それと同時に「協働の 6 原則」という横浜コードをつくった。市民と役所は対等の関係にたち、目的共有をし、情報共有し事業を行う。そして、市民活動を下請けとしてではなく支援の対象として位置付け、市民活動の支援条例をつくり、活動の場としての支援センターや各種の助成金など支援メニューをつくった。横浜が全国に先行してこのような仕組みをつくったのは、ひとつには市民活動自体が非常に活発であったことが要因です。とくに、横浜では、人口急増で福祉や子育ての施設などが東京などに比べて不足していた。その不足を自ら補うように 1980 年代の介護や子育ての市民活動が地域の女性によって非常に活発になった。市の職員もそのような活動と多くの接点を持っていた。市民の力に押されたというのが実情です。そして、98 年の NPO 法や介 2000 年の介護保

険法によってかなり成長し確固とした経済基盤を持ち、当事者性の強いサービス提供団体になったわけです。そういう横浜の独自な展開をつくったというのが、私たちの世代にとっては大きな仕事だと思っています。

田口　それが高秀秀信市長のとき？

中川　そうです。高秀さんのときです。高秀さんは、市民活動に公金を出すことが憲法 89 条に違反するのではないか、というような疑問を持ってらした。「89 条委員会」を開催し、議論し、その結果。協働の原則という横浜コードができたわけです。公金の支援というのは、例えば私学助成にもあったわけですから。

田口　ありますよね。

中川　そういう中で市民活動を支援することも OK という筋道を立てた。『調査季報』120 号で、コミュニティ行政の基礎調査を KJK の林康義さんが高秀さんに説明してくれた。高秀さんが納得してあの座談会の次の日にこれからは、市民と行政のパートナーシップだと言って全庁的に広がったのが発端です。

　つまり、それは都市科学研究室がなくなって、企画調整室の中に来て、それだけのことができるような環境になったってことです。だから、そういう意味での上層部に、話をする機会を与えられた。年中じゃないですよ。3 年やった調査を 1 回だけとか、そんな感じですけどね。そういうことを、きちんと話すチャンスをもらえたっていうか。私はまだ担当でした。係長でも何でもないですけど、周り人たちが、そういうふうに段取り立ててくれた。それだけ基礎調査というものをきちんとやると、組織を動かせるなっていう実感は持ったっていう感じですけどね。

青木　細郷市長の時代というのは、中川さんにとって、どういう時代でした？

中川　細郷市長の時代は。ただ、都市研はつぶされなかった。なぜかっていうと、多分、社会党と自民党が一緒の与党という時代ですね。

田口　ありましたね。

中川　そういう時代が結構続いたじゃないですか。

田口　日本社会党の村山富一（首相在任 1994～1996）さんが首相になったのは、そのときでしたっけ。

中川　いや覚えていません。

田口　当然、そのときですね。

中川　そうかな。

田口　社会党と自民党が合同して。村山さんが首相になった。

中川　なりましたよね。あの当時、横浜では細郷さんの時代でしたか。飛鳥田さんが辞めた後、細郷さんがなって、社会党も一緒に選挙応援した、という時代ですか。

田口　あんまり機構とか人に、田村さん以外については触れなかったっていう感じですね。

中川　そうですね。田村さんは局長から降ろされましたよね。

田口　その後やっているのは、みんな企画調整局の流れの人ばかりですもんね。

中川　そうですね。だから、あんまり、改革とそういうことしなかった方なんじゃないですか。自分が編集したのかどうか忘れましたけど。細郷さんも調査季報に登場されたことがあります。

田口　細郷道一市長は、あまり自分で新たな政策をやる人じゃないという評価がありますね。

中川　そうですね。そんな感じでしたよね。

田口　ある人が言っていましたけど、「まちづくりについて、分かった振りをしているけど、全然、分かっていなかったんじゃないか」とか。

中川　内務省の官僚の方ですよね。世の中、社会みたいなものを、どこまで意識してた方人なんすかね？と、思いますけどね。

田口　だからその意味で、市長の存在感が薄いから。私なんか、係員時代や係長になっても、やりたい放題できたのは、あんまり存在感があるようでなかったからかもしれない。

中川　なかったですね。

田口　そういうことなんですね。後になって考えてみると、なんでできたのかなと。

中川　いや、思想のない人だった。内務官僚って、そういう感じの人なんじゃないですかね。保守的だけど、別に、なんかやるわけじゃないっていうかね。

田口　そうですよね。

中川　その後の高秀さんのほうが、全然、積極的だった。河川行政の技術者さんですよね。

田口　そうですね。

中川　都市科学研究室を企画調整室の中にもってきなさい、というようなことを言ったのかよく分かりませんけれど。図書なんかは全部、整理して、人と予算だけで動いた。私が、そのとき非常に問題だからきちんとやりたいと思ってた、「コミュニティ行政基礎調査」の調査費も結構付いてましたから、そのまんまやり続けることができた。

高秀さん自身が、当時の区民会議を批判して「区民会議って役人ばかりじゃないか」「町内会の役職者しかいないじゃない」とかおっしゃっていたのは記憶にあります。ですから高秀さんの問題意識として「新しい市民参加のプロジェクト」を始めたわけです。そのとき、私は係長にさせられた。

田口　そうですよね。

中川　「市民参加推進プロジェクト」は、内藤恒平さんがリーダで、小澤さん、秋元さん、竹前さん、私という 5 人のメンバーでした。地域社会、市民活動と行政はどう向き合っていくのか、「市民と行政のパートナーシップ」という考え方のもと、横浜コード、協働の推進指針ときちんと行政の中でも位置付けていった。

青木　市民協働のアイデアを持ってきたのは、高秀さんではなく、中川さんが調べていた内容を高秀さんに伝えた。その辺の動きだしというのは。

中川　調査の中で「コミュニティ行政研究会」を組織した。メンバーは KJK の林泰義氏さん、名和田先生、内海宏さん、桜井淳さんなどコンサルにも入ってもらい、市民局や区役所の職員総勢 40 人ほどのメンバーで 6 地区の実態調査を 3 年かけて行い、コミュニティ行政のあり方と提言をまとめた。それを「調査季報 120 号」で高秀市長、林さんと草野さんとい

う方に鼎談してもらい、「今後はパートナーシップ行政だ」という言葉が市長から出て動き出した。多くの市民と行政職員、コンサルタントの協力を得て行ったわけです。その後、小澤さん、竹前さんに重内さんも加わって堀田力さんが委員長の「89 条委員会」ができ、いわゆる「横浜コード」に則った協働の 6 原則と協働の推進指針ができた、という経過です。その後、協働の考え方と協働事業、市民活動の支援は、全国に広まった。私は横浜市の退職後、茅ヶ崎で市民活動推進委員を頼まれて、協働の推進事業の評価のようなことをやっていましたが、横浜コードに則ったやり方でした。

青木　協働に関心を持ったのはいつぐらいでしょう。最初の頃からですか。

中川　1990 年コミュニティ行政の調査を始めたころは、協働とかいう言葉はなかったです。飛鳥田時代の市民参加は、区民会議、市長への手紙などでしたが、区民会議も時間がたつとメンバーが固定して当初めざしていた市民同士の議論というより当時「どぶ板議論」といってましたが、身近な要望ばかりになっていた。さらに、地区センターや公園の建設委員会では、町内会の役職者が行政提案をそのまま受け入れ、討議も行政の段取りどおりにすすめられていた。当初、飛鳥田さんが目指していた、市民同士が議論して、何か物事を話し合いで解決していく、というような場にはならなかった。

私たち市の職員は、当時、仕事としてではなく市民の活動によく参加していました。たとえば、私が参加していたのは、戸塚区のドリームハイツという県公社の団地の自主保育の活動や高齢者のたまり場活動（今でいえばデイケア）ですが、いずれも資金も場所も自分達で自主的に調達して取り組んでいた。私が最も参加の問題で危機感を覚えたきっかけとなったのは、中区の本牧山頂公園の市民参加のあり方です。公園予定地では、地元の遊び場運動の「いいじゃん会」という活動が活発にありました。予定地でキャンプをしたり、様々な活動を展開して公園のあり方を実践的に考えていたグループです。私も子どもを連れて活動には時々参加したりしてました。しかし、実際の公園づくりの建設委員会には町内会の役員のみ呼ばれ、「いいじゃんかい」のメンバーは呼ばれなかった。そして行政提案がそのまま議論されるのみとなったのです。当然のことながら、私たちのような市職員との亀裂も深まりました。町内会の役員のみの参加のやり方は明らかに限界にきていた。しかもそのやり方は、市民の本来の活力を遠ざけるものと感じたわけです。当時は、市内に子どもの遊びや不登校の子どものことを考える会や自主保育の会などたくさんの市民グループが活発に活動していたのです。

私が始めた「コミュニティ行政基礎調査」は、そのような市民の活力とか動きがどのようになっているのかを調べた。そして地域コミュニティとテーマコミュニティは、どこにでも併存しているということを実証したものでもあるのです。テーマコミュニティは要求運動ではなく自分達でなんとか取り組んでいく自主的な運動ですが、行政はその活力と向き合うことはできていなかった。

田口　そうですね。

中川　そういう横浜スタイルが出てきていて。その人たちが行政と一緒にやっていけば、もっと力を持つ、良いまちができるわけじゃないですか。行政と市民とのパートナーシップの中で、つくっていくっていうようなことを市のコミュティ行政の考え方として提起した。それを後に協働の推進指針としてつくった。ただ、ベースは、そういう市民の力が本当に生まれてきてたから、できたっていうことですよね。東京都などの他の自治体とはちがうところだと思います。

田口　結構、元気でしたよね、1980 年代は。

中川　そうです。

田口　いろんな分野で。

中川　ものすごく元気でした。90 年に都市研がなくなったときには、それが形になっていく時期でした。もともと NPO 法が 98 年。介護保険法 2000 年。そこに市民がやってきたものが位置付けられた。働いてないけれども地域の女性たちの市民の力はすごかったです。横浜では、子育てとか介護の問題とか、自分たちの生活課題を地域の課題として取り組んでいた。茅ヶ崎市では市会議員になって社会活動をしている女性も多い。東京の世田谷区もうちょっと違う。横浜は女性の働き先もなかったし、すごく知的で活動力のある人たちが地域で活動をしていた。その人たちと行政職員のネットワークが、うまくつながり合っていた、というのも横浜の特徴かもしれませんね。

青木　先駆的な取り組みをつなげていくに当たって、苦労されたことはありましたか。

中川　つなげていくっていうか、自然につながっていったって感じですよね。だから、新しい動きがあると、私は市役所に呼んできて、研究会みたいなヒアリングの機会をもうけたりすると、そこに、ちょっと聞かして、みたいな職員が来たりとか。さらに、調査季報に執筆してもらったり、座談会に参加してもらったりしたことも大きいと思います。

田口　割と自由ですよね。

中川　自由ですよ、本当に。

田口　役所は、自由だったから。

中川　だから、松本さんが辞められたときに、官僚制との闘いでもう駄目だって、悲観して辞められてくわけですけど、政治ゴロみたいな人たちがいなくなったというのが、一つあるかもしれませんね。政党政治の雑な力がなくなって、市民の生活や地域に根差した活動の方が説得力がある。学生運動をやってた人たちも含めてだけど、それに対応する職員は各局に結構いました。

田口　いましたよね。あれって、いわゆる昔の 1950 年代とか、まさに政治ゴロっていうか、政治の裏で飯食っているような、そういう雰囲気が、どんどん、なくなっていったということですかね。

中川　そうですよ。とくに、都市デザイン室の職員はよく地域にでて行っていた。宮沢さんとか、園部さんとか。

田口　そうですね。

中川　ワークショップの際に、例えば機材の置き方とか方つけとか、当時の緑政局とか、デザイン室とか、誰かに電話すると、「分かったよ」とか言って片付けてくれるとか、そういう自由なやりとり。

田口　全然、関係ないセクションの人だけど、「ああ、そう」って言って、ぱっぱとか対応してくれるとか。

中川　そういうの。

田口　そういう雰囲気がありましたよね。

中川　そういう雰囲気があって、自由に議論したりとかありましたよね。あれは何だったかって言われると、何とも言えない。根拠は何なのかしら。

青木　少なくとも、その自由な雰囲気があって、何かやりたいと思ったことを思い付くとそれに共鳴する人たちがやったということですね。

中川　それは役所の中だけじゃなくて、市民との間でも。

田口　市民の中でもね。

中川　市民との信頼関係は行政マンのほうが市会議員さんなどよりあったのでは。これも横浜の特徴ではないかしら。茅ヶ崎市では違う感じがします。横浜は市民と行政という感じですよ。行政現場と市民の活動の現場が結び付きながら、いろんなものを作る。市民からヒントをもらう。

田口　嶋田昌子（本牧在住の郷土史家であり市民活動家）さんとかね。

中川　嶋田さんも半ば行政マンのようなところもあった。瀬谷区の清水靖枝さんとか。「川を考える会」などでは、お名前わすれましたが、ラーメン屋さんの方の言葉はすごい参考になった。別に役所で仕事してなくても、ドリームハイツなど活動には時々お邪魔してます。そんな感じですね。

青木　パートナーシップとあえて言わなくても、自然と結び付いていくというか。

中川　そうですね、そういう結び付きをつくったっていうよりも、自然にできていて。そういう関係は何であろうかって言われると、他都市と違うと思いますね。

青木　それ、横浜に特殊なことと思われますか。

中川　特殊だと思いますね。

田口　他の所だと１人､2 人ぐらいはいるけど､あと全く我関せずという人ばっかりですね。
中川　あとは、そういう優れた社会的に世にでて有名になっていくとかではなくて、地についたところにいる。仕事ではなく相談にのったり対応していくというところでもある。別にセクションが変わっても対応していくみたいな。動員掛ければ出てくるみたいな。

青木　それは仕事以外、人と人とのつながりという。

中川　そうですね。人と人とのつながりで、それをパートナーシップという。組織と組織の関係ではなく、「顔の見える私とあなたの関係」が基本です。「市民まちづくり」の世界ってそういう関係の中で動いていく。調査季報 120 号の市長鼎談に原点があります。協働関係っても、契約や協定を結ぶとかではなく、「一緒に汗かく」というようなことが原点です。

田口　そうでしょうね。それって、だから今の役所はどうされているのか知らないけど、割

と文字化したいんじゃないですか。契約的にしたいんじゃないですか。

中川　契約して、文字化して、制度化されていくと、活動のもとの自主性や柔軟なところが失われていく。私がヒアリングさせてもらっている精神障害者の当事者運動は、最初は病院から退院してきた人たちのたまり場であった。家族も当事者も役人、医者も一緒になってフットボールをやったり、劇をやったりしていた。民家を借りて居場所となり、当事者たちが考え出したいくつかのメニューがある。「かたらい電話」というのは、一人暮らしの人が、夕食が終わって寝る前にだれかと話したくなる。その時に対応する仕組みなのですが、各区一館の生活支援センターという制度の中ではなくなっていく。立派な施設ができるわけですが、そうすると、当初のたまり場みたいな当事者運動も含めた広がりがなくなっていく。標準化されていくわけです。制度の枠の中で職員が働くとなると、一見安定したようにみえますが、当初とは違うものになっていく。つくり上げた人たちとかとのあつれきが出てくる。

介護保険制度もそうですよ。作り始めた当初、市民的な広がり持ちながら、新しいニーズに対応してたものが、制度の中で細分化されて、ここは 15 分、ここは 30 分の介護とか、なってきた。9 割以上が委託の中での作業となる。3 割ぐらいは自主的なところが欲しいとというのが当初からやってる人たちの願いです。今、市民活動も違う段階に入っていると感じます。医療とか介護とか、ものすごく制度化された。一見、いいと思うけれども、最初の人間的な多様な対応、顔の見える関係、信頼、そういうものがなくなっていくというのは課題です。

田口　どうしても、そういうふうになりやすいですね。

中川　壁にぶつかっているところも多いけれど、ここで、また新しいものが生まれてくるのではないか、と思いますけど。

青木　役割を決める、制度化するっていうことと、それで責任の範囲を明確にするっていうのが一方であるけれども、それによって、逆にいうと、自由な顔の見えるようなコミュニケーションが失われていくっていう側面もある。

中川　そういうことですね。

青木　両方なんですね。

中川　両方ですね。

田口　それって、明確に責任を区別できるものでなくて、いろんなものが重なり合っていく

にもかかわらず、これ、お仕事ですと決めると、切るしかなくなってくるという矛盾があるんですね。

中川　だから、青木さんの問題意識に戻ると、今の話は、どういうことになるのかな。

田口　企画調整の創成期は割と混沌とした中で、やっていこうとしたのが、だんだんきれいに整理されていく。そして、それが高度になってくると、かえって切っていく（分化する）ようになってしまい、また話が違っちゃうですね。

中川　私がかかわっていた企画調整室の時代は、例えば福祉局の企画課とか各局のほうが情報がある。総合計画つくるにしても、企画調整自体がそれを上回る情報量がなくて抽象的な理念しかだせない。基礎的な調査研究という私らがやっていた仕事というのは、たとえば市民意識調査は 50 年も続けている。今は、こんなに心配事が増えてますとか、家族の形はこんなに変わりましたとか、地域がこんなふうに変わりましたっていうようなことを継続して分析し、市民生活白書で発表する、というようなことをしてたわけですが、政策を考える前提としても大変重要と思います。

青木　それで市民意識調査とか『市民生活白書』ということは、それ、仕事として残ったというような、このフォーマルな動きは大きかったわけですね。

中川　残ってますね。

青木　逆に、徐々に、細郷市政、高秀市政、中田市政って、なっていく中で、最初にやってたことで失われていったものって、何かありましたか。

中川　市民との関係ですね。

青木　市民との関係。

中川　それは協働関係とか、パートナーシップとかで、私がいるときは作っていったけれど、失われたものっていうのは、市民と職員の情報共有と議論する場面が急に失われた、ということではないですか。

青木　中川さんから見て、周りで、こういったことがなくなってきたじゃないかとか、いったものがあれば。

中川　中田市長の時代には、民間の企業やコンサルとの会食などは禁止?された、と思います。コンプライアンスとかで非常に厳しくなったのではないですか。
私が今が今付き合ってる職員は、せいぜい50代、60代なんです。30代とかの人たちが、どれだけのネットワークを持ったりしてるのかは見えないです。それは本人たちに聞いてみないと、分からないですね。

青木　都市研自体の役割の変化を感じることは、そんなになかったのですか？

中川　そうですね。

田口　名称は変わったにしても。

中川　高秀市長の時代は,コミュニティ行政基礎調査が終わった後に、市民参加プロジェクトでのモデル事業が始まって、職員の研修や参加の場には頻繁に行ってました。推進指針や市民局の相談、援助など、市民生活白書の編集などなどでとても忙しかったです。
　中田市長の時代は、「横浜会議」という市民提案型の調査研究の仕組みをつくりました。横浜会議に登録してもらい、市民、市民団体やNPOに調査・研究のテーマを募集し、審査会で採択された件について調査費をつけます。その人たちを中心にして局の担当課と協働関係で調査をして、政策につなげるという仕組みです。政策提案の中でも、協働契約という仕組みは協働事業を始めるにあたって重要なテーマです。提案したのは、子育て支援のNPOびーのびーのです。行政と民間業者との契約関係は、言ってみれば、片務契約と言ってもいいくらい不公平ですよね。仕様書の内容、責任、著作権など下請けの仕組みです。
子育て支援の現場をもっているびーのびーのは、現場の中で仕様書で対応できない問題が起こった時に困ってしまっていた。仕様書には、その事業の目的が書いてないので、目的にそった対応を求めたわけです。協働の原則の目的共有というものを仕様書に入れ込み「協働契約」という仕組みを提案したわけです。

中川　もうひとつは、「生活困難層への公民協働の生活支援システムのあり方の研究」です。元ケースワーカーの提案ですが、どうやっても、うまく支援できない家族がいるという支援困難な人々とはどのような人達か、その支援のあり方についての研究です。瀬谷区の市民や区役所職員、介護や生活支援の全事業所などで事例調査を行い、困難事例というのは、複数の困難を抱えた家庭であること。例えば、一人親家庭で、お母さんが精神疾患を抱え子どもを育てている家庭で、子どもに満足な食事を与えられない、保育園にも送り迎えできない家庭や夫婦で認知症の家族というような人々です。その支援には、伴走者が必要だ、というこ

とを導き出しました。伴走支援は、後に「寄り添い支援」という言い方でひろまりました。民間の活動や困難な人々を支援している現場には、課題山積ですが、それを改善するチエや仕組みが必要ということです。横浜会議で採択されるということは、市長がOKだしたことになるので、結果を施策につなげることができるいい仕組みと思いますが、担当の事業局にはプッシャーになったようです。現在は、続いてないようです。

青木　悪役ですか。

中川　そうですね。

青木　私、びーのびーのって、去年、見学に行ってきました。

中川　そうですか。あそこの原さんたちが、横浜会議で協働契約の提案をした。力のあるNPOです。子育て支援の全国組織の事務局は、港北区のびーのびーのにあるんです。一番最初に、親子の広場の必要を提案し全国に広まった。広場の拠点づくりには、当時の社会福祉協議会にいた鈴木隆さんがかかわってていた。鈴木さんは、ご自分が保育第一係長のときに、調査季報に、保育行政はこうあるべきだというのを書いているんですよ。時間外保育の問題とか、産休明けの保育の問題とか、これがなければ働き続けることはできない。ご自分が共働きしてたので切実だったということですが、当時の市役所の方針を批判的にみた論文ですから私はちょっと心配しました。しかし、結局ご自分が現役の間に全部やり切ったのでたいしたものです。子育て事業本部をつくり、子ども青少年局の時代にも待機児童ゼロなるようなレベルまでやったというのは、鈴木さんがいたからと思っています。

田口　さっき少し出ましたけど、松本さんが都市研室長を辞めた本当の理由って、何だったんですか。

中川　飛鳥田さんは、都市科学研究室に何を期待したのか、は松本さんの遺稿集に書かれていますよね。「それは官僚主義をぶち壊してほしかったって。自由に息を殺してる若い子たちの連中、自由に解放してやってくださいって。そういう思いでつくったんだけど、都市科学研究室自体は、そういう、いかめしい名前になっちゃって、ごめんなさい」と書いている。本音は、こういうところにあったんですよね。

青木　そこは読んだことが。前に、いただいたので、それで拝見しました。

中川　あと最後に、飛鳥田市政の総括みたいにして、松本さんが「市役所は残った」という論文書いていられますよね。基本的には革新市政の現状に絶望したっていうことですね。

田口　ということですか。

中川　そういうことですね。特に官僚制の中で、それを打破できなかったっていうか、そういうことの中に、政治集団があって、その政治集団がきれいなことばっかり言っていて、そのきれいなことをPRして、行政と政治との乖離が出てきた。良心的な職員にとっては嫌気がさしてはきた、という現状があった。希望をもてなかったのだと思います。

田口　でも、松本さんが都市研をおやりになったの、4、5年ですよね。

中川　4、5年。都市研の以前、研究職もいれると7年ぐらいですか。

田口　都市研を始める前を入れると7年いた？

中川　7年ぐらいと思います。

田口　そんなに簡単に、組織や職員意識を変えられないと思うんですけど。

中川　私も当初、松本さんから、この官僚制みたいなものの打破を、3000人いればできる、というようなことをおっしゃっていた気がします。思い違いかもしれませんが。そういう一部の人たちで変えられるはずだって、本気で思ってたのでは、と思います。私は、直感的にそんな簡単じゃないよなと思ったんですけど。朝日新聞での体験があったのかもしれませんね。

田口　簡単ではないけど、継続してやっていけば、本当に動くような人的ネットワークつくってやっていけばできるかもしれない。

中川　松本さんは、この時代は、まだネットワークがなくて、あれだけの市民の盛り上がりと、私たちのこの市役所のネットワークの中で、いろんなものができてきたっていう時代は、知らないんですよ。1984 年に亡くなっていますから。すごく暗い感じで書かれてますよ、最後ね。

田口　そうか、だから・・・。

中川　私、先日もう一回読んでみたときに、そうでもなかったんじゃないのって。

田口　いや、ちょっと諦めが早いなという感じがしますね・・・。

中川　役所の病理ってものに対して極端に嫌悪を感じてらした。戦争体験との中、大本営発表で極端な似非情報を流し、だまされて進軍した若い学生たちが、特攻隊として亡くなっていった。負けるのが分かってるのに抵抗することはできなかった。そして、ご自分はシベリア抑留となり、そこで生まれたばかりのお子さんを亡くす。そういう体験がある人たちと、私みたいに戦争も知らないし、自由に生きている時代しか経験したことがない人というのは、役所への感受性がちがうのでは、と思いますが。

田口　まあ、そうなんでしょうね。

中川　そんなに役所って、ひどかったかなと。もう。

田口　なるほど。

中川　世の中に「役所と車さえなければ」って書いてある。そこまで言うか、と。

田口　そうか。

青木　根底に怒りがあったのかもしれませんね、役所というものに対して。

中川　怒りがあったんでしょぅね。ものすごく強いい怒り。根拠もなくえばっているという怒りは大きかった。そして、クリスチャンでしょ。ここから先は絶対駄目っていうのありましたよね。だから、踏み絵を踏まされてるみたいな時がありました。ものすごく潔癖なところっていうか。権力の象徴としての役所に対して。

　やめられた後ちょっとほっとして、自分なりにやろうって思いました。やり方がわかっていたから。研究会つくったり、市民意識調査したり。時々近くまで来てくださって一緒に食事などしましたよ。室長の舟橋さんとは口もきかなかった。あの方社会党員で何をやってらしたか知らないけど飛鳥田さんが社会党に復帰した時嬉しそうでしたよ。高井さんの室長の時もあまりしゃべらなかった。お任せという感じでした。

田口　高井労さんも、ずっと都市研室長をやっていましたよね。

中川　室長やってましたよ。

田口　それで。

中川　だから、加藤さんと、私と、あと一人の職員の 3 人。係長は北小路さん、地図情報や地区カルテが好きな人でした。職員 3 人と係長 4 人で仕事してたんです。

田口　逆に、そっちのほうが気楽ですね。

中川　気楽というか、しんどかったですけどね。

田口　だけど。

中川　そういう中で仕事していて、コミュニティ行政基礎調査を企画したわけです。そこで、都市研がなくなり、調整室の中に入ったから、逆に、その結果を生かす道が開けた。

田口　でも、組織的には、企画財政局の中の、一応、企画調整担当理事の下に、くっ付いてるような形ですよね。

中川　理事の。だから、それは、なくなってからでしょ。

田口　いや、なくなる前からです。

中川　なくなる前？

田口　形式上は一応、企画財政局の中の企画調整担当理事の所に、都市科学研究室はくっ付いてることになっている。

中川　なってるけど。

田口　形式上は企画財政局というのは、当時の細郷市長の問題があるにしても、市長に一応直結していることになっている。

中川　でも、そういうのは、全然、感じられない。

田口　感じられなかったですか。つまり、多分、高井さんや伊藤さんという鳴海正泰さんにつながる人材を都市研室長にした段階で、もう、君たちは必要ないと言われたのか・・・。

中川　もう、終わりという感じでしょう。ただ、加藤さんが組合をやっていたので、組合問

題になるのを当局は心配していたのではないでしょうか。

田口　いてもいいけど、あんまり問題を起こさないで静かにしていてくれ。

中川　そういう感じですよね。

田口　ということなんでしょう。

中川　そういうことです。そういうラインから外れて、勝手にしてなさいよ、みたいな。だから勝手にやってたっていうか。そういう感じですよね、多分。

田口　そうですよね。だから、高秀市長になって、やはり、ちゃんと使ったほうが、いいんじゃないかとなった。

中川　そういうことだと思いますよ。

田口　逆に、そっちのほうなんですかね。

中川　多分、そうだと思いますよ。大場さんが調整室長だったと思います。

田口　大場さん。

中川　加藤さんは組合の執行委員やってましたから、そして、経済局の時に大場さんと仲良かったから、それで、やりとりあったんじゃないすかね。私は本当に何も知らされていませんでしたから、いきなりなくなります、という感じでした。組合員でしたから相当抗議はしましが、相手にされませんでした。

田口　大場さんが一瞬、局長をやっていた時代ありましたよね。あれ、いつだったかな。そうか、大場さんが企画調整担当理事だ。

中川　そのときですよね。

田口　そのときに、つぶれているわけだから。

中川　どういう話で、高秀さんが呼んだのかも分からないです。本人に聞いてみないと。聞くなら大場さんだけど、そんなこと覚えてますかね。加藤さんには組合の執行員だったので

あいさつはしてたんですね。私には何もなくて、ある日、突然でした。

田口　なるほどね。でも、そうか。だから、高井さん、伊藤さん。

中川　伊藤さん、退職されてる年齢でしたからね。最後の室長として終了という。

田口　伊藤さんは鳴海さん関係の人ですよね。その様な人が何人かいますね。

中川　私は全然、知らない。

田口　ずっと総務局調査課時代から企画調整室まで鳴海さんに付いてきた。

中川　付いてた人とは？

田口　伊藤さんは何をやっていたかな。「市民で市長をつくる会」でしたか、何でしたか。

中川　そんなのありましたね。

田口　企画調整局にいた人たちの名簿を作って、何人かの人に「この人、どういう人ですか」って聞いたら、この人はああいう人で、こういう人でと説明を受けました。

中川　そこは分からないです。

田口　だから、よく伊藤さんが細郷市政で都市研室長になれたと、私は考えたんです。高井さんもそうですね。だから、鳴海さんの関係者である高井さんと伊藤さんをよく室長に据えたなと思った。この人事でもう、飛鳥田・鳴海時代は最後にしてれというメッセージかな、と思った。

中川　最後にするって、そういう感じです。何にもしないで。

田口　そうですね。

中川　北小路さんって、いるでしょ。北小路さんが課長だったか、係長、課長だったかな。北小路さんは、その革新市政の時の調整係長です。

田口　入っていますね。

中川　京大出身で。

田口　そうですよね。だから、この名簿を作っていて、なるほどなと思えてしまうこともあった。でも、高秀市長が、どういうふうに、中川さんたちの都市研の財産を使ったのかは、よく分からなかった。それは、きょうの話でよく分かりました。それは実質、都市研という形式でなく、中身をちゃんとやって行こうとなったんだなと、分かりました。

中川　高秀さんは、建設省の事務次官でしたよね。多摩川の河川敷の問題で、市民が要望してる河川敷を公園として残したら結局流されちゃったわけじゃないすか。「市民参加って、難しいもんなんだよ」とか言ってらした。

　でも、高秀さんと、私との出会いってあるんですよ、実は。あれは不思議な話で、瀬谷区の長屋門公園ってあるでしょ。あそこで、市の職員の市民参加のグループというのがありました。総合計画に反映するのを目指していろいろな職員のグループをつくり、調査季報に議論を掲載したのです。そのひとつに市民参加のグループがあった。リーダーは公園づくりの吉田哲郎さん。

田口　緑政局（公園関係部署）の人ですね。

中川　いわゆる、後に市民参加をやるグループの人たちのつながりがあって、私がその時司会役だったのです。長屋門公園に来て市長が来ることになっていて、懇談会のようなことしたのです。技術屋さんだから囲炉裏や建物がとても気に入って、黒い柱とかとんとん、たたいたりして、「いい所だな」って座り込んじゃった。ここで食事をみんなでしようとしてたのに早く帰ってくれないかなあ、思ってたんですよね。やっと帰ってくれので皆て懇談した。その次の日です。鈴木隆さんと記憶してますが、「市長が昨日は楽しいことがあった、と言って、中川さんという人がいて、とてもいい話が聞けた。会ってこいって言われたよ」ということで来たわけ。「あいつは課長か」と聞かれたので、「いえ、ただの係員です」と言ったら、「おかしいじゃねえか。あいつ課長にしろ」と言ったとか。それは、できません、ということなった。やっぱりもともと市民参加に興味あったんですよね、

中川　2007 年は担当課長にさせられたのよ。なぜかっていうと、政策支援センターつくる 1 年だけ課長して、定年で再任用で係長になった。鈴木さん総務局長の時ではないか、と思いますが。鈴木さんは都市研の機能をもつ政策支援センターをつくったほうがいいという考えだったのだと思います。市民意識調査などの基礎調査、調査季報の発行、市民生活白書の発行です。

田口　政策支援センターというのは、要は何なんですか。

中川　企画調整室の中に、政策支援センターっていうセンターつくった。

田口　それは本当に何をやろうとしたんですか。

中川　毎年市民意識調査を、『白書』を出し、『調査季報』編集し、もう一つ、GIS という統計をベースにした地図情報システムを束ねたものです。そういう基礎情報部門を位置付けて政策支援のベースをつくる、ということでしょう。

田口　それは、しっかりしていた時代の都市科学研究室みたいなものですかね。

中川　スタッフと予算は、そのままあって、3 階に部屋と蔵書のスペースもあった。その 3 階の部屋っていうのが、政策支援センターと看板がついていました。政策課の中の調査系というような位置づけでした。書架もあって。図書館の司書をしていた方に本の選定を頼んだ覚えがあります。よくセンターのスペースがとれたな、と思います。

田口　ちらっと覗いたことがあったと記憶しています。この NPO をつくる準備をしている時だったかな。割と若い人で元気のある人たちがいませんでした？

中川　だから、政策支援センターつくったときに、初代の係長っていうのは賀谷さん。

田口　賀谷さんね。

中川　係長は、賀谷さん、唐澤さん、関口さん、林さんという順番だったと思います。私は、3 階にいて横浜会議や政策立案基礎調査などをやっていました。最後は 2013 年発行の市民生活白書を出版しました。私にとっては、いままでやってきた仕事をそのままやり続けた、ということです。

田口　支援センターそのものは、いつまで、あったんすか？

中川　だから、今年の 3 月まであったのではないですか。

田口　役所の機構図に、政策支援担当ということで、担当係長が付いてんです。賀谷さんもそうだけど、それが政策調査っていうふうになって、政策調査担当の課長というのが 2016 年までいるんだけど、あとはもう、何も付いてない。

中川　退職したその後のことは、よくわかりません。今年度も市民意識調査の予算は付いてるみたいですが、『調査季報』や市民生活白書の発行の年ですが、予算がついているか、はわかりません。

田口　でも、政策支援センター絡みの戦略は、さっきからお名前が出ている、鈴木隆さんが中心人物だったのですか。

中川　その必要性を感じていた人です。

田口　鈴木さんが、一番分かっている。

中川　そうですね。組織的にも、ちゃんと位置付けようとしたけど、彼も人事的な配慮までしてくれてるわけじゃないから。

田口　だから、そういう意味でいうと、加藤さんは編集をやっていましたよね。

中川　加藤さんは都市研の時代には、職員しとして季報の編集や地域社会研究会をちゃんとやってましたよ。組合の執行委員もやっていた。組合の執行部だから、ずっとその仕事を続けられたわけです。でも、最後は、男の人って、やっぱり昇進とか、光が当たりたいのかなと思うけど、最後、仕事しなかったですね。体が弱いってこと、あったけど。
　横浜会議つくるときに一番頼りになったのは、総務省から出向した28歳の若い水野さんという課長ですね。仕事をしようという意欲があるから付き合いやすかったですよ。横浜のこと、全然知らないので、横浜会議を立ち上げる時に、どういう人たちに参加してもらうかというので、ラフなペーパーをつくって、横浜市内の大学と主なNPOを一緒にまわったのです。その時びっくりしたのは、ある老練なプランナーからなるNPOの会合に出て説明をしたときのことです。終わった後に、やたら感激している。あの人たちはどういう人達ですか、というのです。総務省の会議では、説明する自分の席はいつも正面なのだそうです。その時は、ちょっと入り口に近い横のスペースに座って説明したのですが、そのようなことははじめてだ、というのです。この方は、こういう所に座ってしゃべったことしかないっていうわけですよ。「サークルではないけれど、市民の会合というのはこんなもので、どこに役所の人間を座らせるとか、そういうことにあまり気をつかわない」とって言ったら。すごいショック受けてました。その日は帰りにビール飲んで、「僕は、すごい体験しました」みたいなこと言ってさ。

田口　ミズノタカシさん？　横浜会議の資料は、なんか残っているのでしたっけ？

中川　それぞれの報告書があるけど、どうしたのか。私も、よく分かりません。簡易な報告書はもらっているはずです。

田口　だから、中川さんが嘱託で 2013 年まで一応いたというふうに理解しています。それまでは政策支援センターらしきものはあった。

中川　そう。

田口　そこまではあった。

中川　私の記憶では、2013 年に『白書』作って、私が退職いた後は、私の代わりの人がいたわけではなくて、係長としてヨネミツさんとか、セキグチさんとかがいたんじゃないのかな。その後のことはわかりません。

青木　そうですね。

田口　聞くべきことは聞いたとしても、本当に知りたかったことは知れたかどうか。

中川　何だか分からないでしょ。

青木　いえ、最初に聞きたかったことも聞けましたし、今回の話を受けて、また考えることも多いと思っています。あと、最後に、これをお聞きしたかったことがあって、こちらの最後に書いてあるんですけども、仕事をする上で最も大切にしていたことを伺えたらと思います。

中川　仕事する上でのこと。その時代の社会状況の中で、市民生活の政策的な課題みたいなものを、どう捉えるかというようなことを、いろんな調査とか市民の活動とか、そういうものを通して、いつも意識している。何が、今、一番、課題なのだろうかっていうことと、同時に、それを浮かび上がらせるための調査を企画し、『調査季報』を編集するっていうようなことですね。それはいつも何だろうかっていうのは探していましたね。私はあえていうならリサーチャーですね。意識調査のみではなく、市民の活動や行政現場の言葉、をヒアリングしたり、議論してきた。いろんな情報から課題として上がってくるものをリサーチして、政策や施策にする前段階、政策そのものを作るのではなくて、政策になる事前準備の段階の枠組みのようなものを作り出すっていうことですね。そのようなことを意図してた感じはありますね。それって、あまり目に見えないものです。

ですけど、そこのところの水面下の動きをどう表現すればよいのかわかりませんが、それを基礎調査というのか、よく分かりませんが、すぐ何かにつなげるわけではない。そこをため込んでいくっていうようなことを、ずっと、やってきた。あえていえば、政策の準備段階の調査みたいなものを作っていくっていうようなことですかね。

青木　言葉にしていく

中川　言葉にしていくっていうか、言葉としてはっきりさせるっていうか、人に説明して納得させられる言葉にする。市民の暮らしというか、市民の暮らしを支えるもの。家族とか、コミュニティ、地域とか。あんまり大きな空間的な発想はできなくて。都市とか町の中に住む、個々の人間、個々の生活とそれを取り巻く人たちを中心に考える。だから、個人、家族、地域ぐらいのところまでです。それを市民まちづくりっていうような形で言う人もいますけれども、あまり大きな単位ではないんですよね。そこから見えてくるものに調査を掛けて、いろんなインタビューしたり、グループヒアリングもした。いくつかのクラスターが調査の中からでてきたら、必ず、生の人間に聞く、ということをします。いくつかのクラスターを見つけ出して、そこから政策課題を言葉にして、取り組みの枠組みも言葉にする。というような感じですかね。だけど、すぐ、それが何々政策になりました、何々事業になりましたっていうものではない。水面下のものなんです。ただ、市民の暮らしの中や活動の現場、行政の現場にはかならず、ヒントになる言葉が眠っている、というのは確信できます。

田口　だから、それが具体の政策になるには、例えば、鈴木隆さんみたいな、そういう人たちがいないとできない。

中川　そうですね。

田口　そして、うまく連携できる人ね。

中川　鈴木さんは福祉と子育てとかの領域で横浜なりのヒットした政策をうみだしましたが、あと数人いたら、地域コミュニティの政策など違ってきたと思います。地域ケアプラザも鈴木さんがつくったのですが、国のメニューは在宅支援介護センターみたいなものでしたから、介護とか極めて限定的な制度として下りてくるものに、交流拠点をつくったりとか、そういうことをしていくわけです。そういうものを政策として横浜が独自に作り出すということが必要なんです。高齢化や人口減少地区の問題や家族や地域コミュニティの変容とか、時代の変化は急激で市民の 8 割から 9 割の市民が不安や心配事を抱えている。かつてのような活力ある中間層が地域の課題に取り組む力は衰退している。公的部門の役割も変わってくる。

鈴木さんは、市民自治とか自治の基本は何かっていうようなことを、真剣に考えている1人ですよね。大きな観光施設を持ってきて、カネを稼ぎ、市民に回す、というような発想はどうでしょうね。現実的ですかね。

私も市民自治とは何かみたいなところまで行き着かないレベルで、少し整理しようとしてましたけど、多分、地方自治法の中に、市民の権利として市長や議員の選挙権や罷免権はありますけど、市民まちづくりの世界っていうのは位置づけられていない。でも、もっと、いろんな豊かな力が混ざり合って、町ができていくと。その中には行政と市民との協働関係みたいなものがベースにあるし、自治体行政はそこにちゃんと視点を置いて、公共的な課題をきちんと公共的なものだっていうふうに見せながら、制度政策につなげていく、制度になる手前のところの整理っていうかな、そこをきちんと持つっていうことですね。分かりにくいと思うけど。

田口　いや。ずっとやってた中で、中川さんとほぼ同じようなことをやっていたけど、あと何人かいました？　ご自分から見て。

中川　わかっていてももっと派手にそとにでていたい、という人のほうがおおいのではないですか。私は水面下で十分なんです。すごく豊かなものがあるから。

田口　水面の上に出たと思ったら、ちょっと足かきがなかったりしてとか。

中川　足をいつもちゃんとかいてる必要がある。水面の中で。だから、泳いでいられる。足かきしてるっていうそういうレベルの仕事。だから、それ、多分、男の人あまり得意ではないかもしれない。どっかで水面に出て派手なことやって、認められたいっていうのが、あるのかもしれないなと思うのね。

田口　そうですね。もう一点、ハードのまちづくり絡みっていうのは、あんまり、中川さん的には、ちょっと距離がありあすか。

中川　距離ありますね。空間認識っていうのがあまりないから、空間が本当に心地良いものとして左右するかどうかとか、そういうことよりは、こんなに貧しい人がいて、この人どうやって助けるのよ。住まいはどうするの、とかいうほうが重要ではと思ってしまう。空間の心地よさとか二の次でしょう、とか思うけれど。でも、あるんでしょう、きっとね、心地良い環境っていうのは。

（了）